ＩＩＡＳ「ゲーテの会」ブックレット
（VOL. 01024）

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－
身辺に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物

（科学・技術分野）

儒医山本亡羊とオジギソウ
― 本草博物学から文理融合を考える ―

公益財団法人国際高等研究所
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト

本ブックレットは、2015 年 7 月 2 日開催の第 24 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。
※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

—日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う—

身辺に眼差しを向け、“文理融合”の世界に遊んだ人物

儒医山本亡羊とオジギソウ

― 本草博物学から文理融合を考える ―

中国では古代から近代まで 4 千年の歴史のなかで、医薬の資源として人間に有用な天産物に関する経験的知識が蓄積され、水火土金石草木蟲鱗禽獣などに分類された本草書が歴代の王朝によって編集された。これらを実用的な観点から集大成した李時珍の本草綱目は江戸時代を通じて盛んに研究され、日本人の自然認識の枠組みを規定した。

しかし、日本では、その知的な枠組みのなかで、日本の天産物を対象とする、有用無用を問わない本草博物学が発達した。この博物学は同時代の西欧博物学のような自然神学的な背景を持たない観察科学的性格と、詩経、万葉集、古今和歌集などの古典理解のための名物学的性格の両面を有するものだった。その意味で、本草博物学は文理融合の学、あるいは詩と真実の知的な探求であったといえる。

とりわけ、近世後期の京都では、和漢の古典的教養と観察科学としての本草博物学と写生的な絵画精神とが濃密なサロン文化のなかで結合した。1770 年代から 1880 年代まで続いた京都の本草漢学塾山本読書室は、小野蘭山の門人である儒医山本亡羊の時代に京都の本草博物学の一大拠点となった。読書室旧跡の土蔵から最近発見された資料群は、そうした文理融合の学問文化の一端を垣間見せてくれる。

本講演では、そのなかから渡来植物のオジギソウに関する資料を選び、同時代の西洋博物学の動向も視野に入れながら、伝統的な文理融合の実態を考察する。

松田　清（Kiyoshi　MATSUDA）

1947 年生まれ。京都大学名誉教授。
専門は、日本洋学史、日欧知識交流史、書誌学、近世京都学。
著書に『新日本古典文学大系明治編 5 海外見聞集』（共著、岩波書店、2009）、『小野蘭山』（共著、八坂書房、2010）、『山本読書室資料仮目録』（単著、京都外国語大学、2013）『杏雨書屋所蔵宇田川榕菴植物学資料の研究』（共著、武田科学振興財団杏雨書屋、2014）などがある。

目次

はじめに　― 山本亡羊に関する調査研究を始めた経緯

Ⅰ　儒医山本読書室の学風
（１）　儒医とは
（２）　父封山の学風
（３）　松岡恕庵・小野蘭山の学統

Ⅱ　本草博物学と屈佚草
（１）　日本独自の博物学「本草博物学」
（２）　屈佚草（オジギソウ）の渡来と名前の由来
（３）　政治哲学と結びついた自然研究を目指す

Ⅲ　「山本読書室」における自然研究の３本柱
（１）　物産会に屈佚草（オジギソウ）を展示
（２）　共同研究会「物産会」とは
（３）　屈佚草（オジギソウ）ブームの契機となった異国草木会

Ⅳ　蘭学とオジギソウ　―「本草博物学」に内在する自然と人間社会の相応
（１）山本亡羊の時代の学問
（２）江戸後期、幕末に伝播したヨーロッパ思想（生命観）
（３）ヨーロッパ思想（生命観）と儒教の知的原理“不可知論”

質疑応答

2015 年 7 月 2 日開催
第 24 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：儒医山本亡羊とオジギソウ－本草博物学から文理融合を考える－
講演者：松田 清（京都大学名誉教授）

（文中敬称略）

はじめに　― 山本亡羊に関する調査研究を始めた経緯

山本亡羊は儒者で医者だが、音楽を嗜み、時鳥（ほととぎす）と半月の模様が刻まれた自分の琵琶を持ち、検校（けんぎょう）に平曲を習っていた。晩年は本格的な平曲を歌っていたが、夜中の 11 時頃、人々が寝静まった後に、月明かりを見ながら平曲を歌うのは最高の気分だと彼は考えていた。実際に夜な夜な歌っていたので、近所の人に「ついに亡羊先生の気が狂ったか」と言われていたというエピソードが残っている。

本日の話は、サブタイトルに「ゲーテの会」のテーマである「文理融合」を入れて「本草博物学から文理融合を考える」としており、私なりに資料を読み解く形で試みたいと思う。

私が亡羊の研究を始めたきっかけは、4～5 年前に京都の「山本読書室」という、亡羊が活躍した旧家・山本家の土蔵の整理を 2 年半ほどかけて行ったことである。土蔵には推定 3 万点、7 千数百タイトルの文献、器物、書画、軸物類等があり、それを整理して仮目録を作ったのだが、その過程でいろいろな分野の資料に触れた。そして分かったことは、そこが学都である京都の伝統的な塾であり、三世代にわたって総合博物館を作ってしまったということだった。山本家は、同時代の文系、理系の伝統的な学問を総合的に三世代にわたって研究した家で、その資料がそのまま現在までタイムカプセルのように残っていたのである。現代の文理融合とどれだけ結び付くのか分からないが、1770 年代から約 125 年間続いた家の学問を、今、資料を通して検討している。その中から、本日はオジギソウに関する資料について話したいと思う。

※　本講演で使用する資料写真は、すべて講演者が仮目録を作成中に所有者の許可を得て撮影したものである。写真の資料は 2024 年現在、京都府立京都学・歴彩館に寄託されている。

Ⅰ　儒医山本読書室の学風

（1）儒医とは

はじめに、儒医山本読書室の学風について話したい。儒医という言葉は、今は一般的に使われないが、明治の中頃まで日本にはそういう人たちがいた。明治 20 年頃まで、日本の医療を担っていたのは漢方医だったが、法律によって、西洋医学で医師免許を取得していない者は医療行為を禁じられてしまった。そのため漢方医は経済的基盤を失い、社会の中でも没落の運命を辿らざるを得なかった。それまで 200 数十年間、医術をもって生計を立て、現

代の言葉で言えば「哲学する心」を持った広範な儒医という人々が、都市、田舎を問わず日本全国津々浦々にいたわけだが、そういう儒医がいなくなってもう 100 年以上経つ。そして、その儒医が担った学問は、文理融合であったと言っても過言ではない。

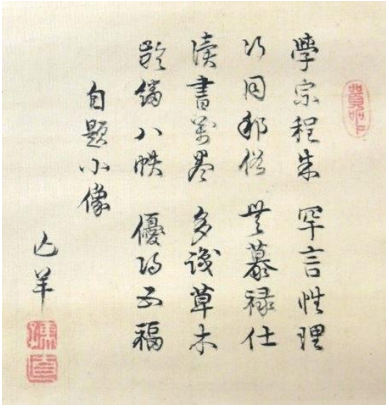
ただし、儒学は現代の言葉でいう西洋哲学とは違う。しかし、哲学と言い換えてもよいと思う。17～18 世紀に日本が鎖国している間、ヨーロッパの哲学者は、日本や東洋にも自分たちと同じように哲学をする人たちがいると信じていた。その東洋の哲学者は、実は儒医のことであった。儒医は医学で生計を立てることで、学問の純粋性、自立性を全うしようとしたのである。

京都では、儒医の生き方として宮仕えを軽蔑し、学の独立を尊ぶという学風が強かった。その中でも「山本読書室」は、三世代にわたって家の学風を貫徹した。儒医とは「医術で生計を立て、儒学を追求する」つまり東洋の伝統の中で哲学をする者であり、「学を売らず、仕官をせず、読書に専念し、徒に著作せず」という「山本読書室」の学風は三世代にわたって守られたのである。

（2）父封山の学風

山本亡羊は 1778 年に生まれて 1859 年に亡くなった、まさに江戸後期、幕末を生きた儒医である。亡羊の古稀の祝いに円山派の画家中島来章が描いた肖像画が残っているが（図１）、それに亡羊自身が以下のような賛を書き入れている（図２）。

（図 1）山本亡羊像　中島来章筆



（図 2）儒医 山本亡羊賛

「学は程朱を宗とするも　まれに性理を言う」＝自分は学問として朱子学を講ずるが、めったに性理については論じない。つまり、スペキュレーション(speculation：推測、空論)をしないと解釈できる。実証的な学風を尊ぶことを示している。「行いは邦俗に同じくし」＝中国由来の哲学をやるが、世間に対しては日本の風俗・習慣に従う。そして「禄仕を慕うこと無し」＝仕官をすることを自分に戒め、自分の学問の独立、精神の独立を尊ぶ。「万巻を読書し　多く草木を識る」＝彼は儒学と本草学を自分の学問と考えた。「齢八帙(よわいはっちつ)を繙(かえ)し　優に五福を得る」＝齢八十に向かい、たくさんの五福、長寿や無病息災を得て満足している。

この学風は彼の父親で儒医であった山本封山（図３）の生き方そのものであり、封山がこの学風を作っている。封山は最初、西本願寺の宗主の学問係として務めていたが、宮仕えを拒否して、医術をもって身を立て、哲学をした。そのときの友人が寛政の三博士の柴野栗山で、松平定信に登用される以前、京都で学問をしていたときの学者仲間である。栗山が封山に贈った「読書室」の書（扁額、図４）が伝わる。

（図 3）
儒医 山本封山
（1742－1823）
岩岱筆

（図 4）扁額「読書室」柴野栗山筆

（３）松岡恕庵・小野蘭山の学統

亡羊は、シーボルトが「日本のリンネ」と呼んだ小野蘭山に弟子入りし、本草学を研究する。そして、文献研究とフィールド研究の両方を行う。彼のフィールド研究のシンボルとなった採薬刀（図５）は、京都の本草学の確立者の一人である小野蘭山の師、松岡恕庵(まつおかじょあん)の遺品で、孫弟子である亡羊が実際に使っていた。その意味で、京都の本草学、つまり自然研究のシンボルと言える。

小野蘭山は江戸に呼ばれて幕府の医学館で本草綱目を講義することになるが、その前に、別れの印として「神農氏」という書を弟子の亡羊に与えた。神農とは、百草をなめて毒と薬を区別する、中国の伝説的な医薬の神である。

（図 5）亡羊所佩採薬刀　松岡恕庵遺品

Ⅱ　本草博物学と屈佚草

（1）日本独自の博物学「本草博物学」

本日のメインテーマは「本草博物学と屈佚草」だが、屈佚草はオジギソウ。学名はミモザプディカ(Mimosa pudica L.)である。これが日本に入って来て間もない頃に、亡羊は「これは屈佚草と呼ぶべきである」と言って漢名をつけている。

そして、神が自然を創ったとするヨーロッパの自然神学の伝統がない東洋では、創造神話を背景にした自然研究ではなく、人間を中心にした自然学が、中国の伝統的な薬学として発達した。それから派生して、薬になるものもならないものも有用無用を問わず自然を観察し、分類する日本独自の「博物学」が生まれる。「本草博物学」と私は呼んでいるが、その「本草博物学」を大成させたのが小野蘭山である。

（2）屈佚草（オジギソウ）の渡来と名前の由来

渡来植物であるオジギソウは中南米原産と言われ、天保 11 年(1840)に初めて日本に渡来した。亡羊は自身の著作「百品考」の中で、「天保 12 年(1841)にオランダ人がこの草を持ってきた」と書いているが、この年は長崎にオランダ船が来ていないので、おそらくその前年(1840 年)のことではないかと考えられている。

実際にオジギソウが「山本読書室」にもたらされたのは天保 13 年(1842)で、中国でアヘン戦争が起き、イギリスの中国侵略が始まった頃である。日本でも大変な危機感の中で国防論議が盛んになっていた。この年の 3 月 6 日に、「山本読書室」の門人である笠戸恕節(かさどじょせつ)が長崎に勉強に行って、そこから種を亡羊の長男・山本榕室に送ってきた。そこで、読書室の薬園に種を蒔いたところ 21 日に発芽したので、25 日に読書室物産会に出品した。そして、この年の秋七月に『屈佚草図説』を出版した。図は亡羊の三男・山本章夫(あやお)が描いた。

（図 6）屈佚草図説／天保 13（1842）刊

『屈佚草図説』の図（図６）には閉じた葉の傍に「手ニ觸ルヽトキハ如此（手に触るる時はかくのごとし)」と書かれており、葉が閉じて垂れるところを上手く表現している。

屈佚の「佚」という字は人偏だが、車編で書くこともある。「屈」は屈む、倒れる。「佚」は飛び出るという意味である。車編の方が正しいようだが両方使っている。屈佚草という名は「縮んで飛び出る」という意味で付けたようで、亡羊の造語ではなく、典拠がある。中国では王朝ごとに暦ができるが、時の管理と同じくらい、医療、医学など人民の健康を管理することが王権にとっては大事なことだったため、中国の各王朝では本草書の編纂が盛ん

に行われた。そうした膨大な文献の中から典拠を見つけ漢名を付けるということをこの渡来植物についても行った。文献は本草書だけではなく、日本の『万葉集』や『古今集』など広い意味での文学なども含まれる。和名を付けるとき、こうした伝統的な文献から付けることは、日本の学問における命名法として独特である。ここでは『博物志』という中国の古典に基づいて「屈佚草」という漢名が付けられた。

（3）政治哲学と結びついた自然研究を目指す

『屈佚草図説』は和文と漢文からなるが、和文草稿の 4 行目に「人君の仁政に感じて生ずと覚えたり」とある。為政者が仁政を敷いたときに、それを感じてこの植物が生じると言うのである。つまり、自然と人間社会の政治体制とは相応関係にあるという東洋的な考えで、自然と人間社会がコレスポンデンス＝相応していると考える。例えば、政治が悪いと地震が起こると言うように、自然と人間社会の現象、特に政治・権力とを結び付けてコレスポンデンスを考える。

また、これは、おめでたい草、瑞草で、立派な政治が行われていると、この草がお辞儀をするという別の解釈もある。堯（ぎょう）という皇帝によって中国の古代に理想の政治が行われていた時代、宮廷には蓂莢（めいきょう）という草が生えていた。これは月の初めから毎日一枚ずつ葉が増えて、15 日目に全部葉がつくと、16 日から 28 日の間に今度は葉が 1 枚ずつ減っていくという草であり、そういう草が生えたときは立派な政治が行われていたので、それと重ね合わせて屈佚草を説明している。屈佚草の説明に蓂莢の説明が混じり込んでいるわけである。

漢文は亡羊が書いたもので、終わりから 6 行目に「予草木数万品を閲す」とあり、私は数万品の草木を今まで調べてきたが、このような神異のもの、珍しいものはなかった。そして、「君徳地に至れば則ち生ず。名づけて屈佚草と曰う、亦よろしからずや。」（原漢文）とある。ここも実際は蓂莢のことだが、為政者が徳の素晴らしい政治をしているときには、蓂莢という花が咲くという伝説を屈佚草に変えている。別の亡羊の草稿では、「蓂莢」や「屈佚草の属」という言葉があるが、この版本ではこの語句を削ってしまっている。

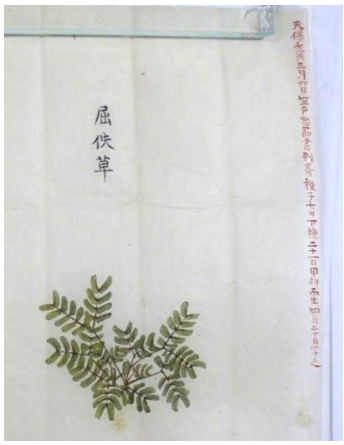
張華（ちょうか）の『博物志』では、宮廷にへつらう佞人（ねいじん）、つまり忠実ではない偽善的な役人が宮廷に入ってくると草が垂れる、合図をするということから指佞草（しねいそう）とも呼ばれる。それに対して、屈佚草は逆に素晴らしい政治が行われているときに、草が閉じると言われている。

つまり、亡羊は科学と政治を結び付けているということであり、現代では批判されるかもしれないが、学問によって立派な政治を行わなければならないし、立派な政治が行われるための学問をするというように、実践的な政治哲学と結びついた自然研究を亡羊は目指していたのである。

Ⅲ　「山本読書室」における自然研究の３本柱

（1）物産会に屈佚草（オジギソウ）を展示

「山本読書室」には薬園があり、そこで様々な外来植物や国内の珍しい植物を栽培していた。それで、和文の草稿は３月に種を蒔いたものを４月の段階で写し、『屈佚草図説』の方はさらに大きくなった７月に写している。草稿には、すべて振り仮名が振ってあり、これを版下にして一般に配布することを考えていたようだ。和文草稿（図７）の右端に「天保十三年(1842)三月六日　笠戸恕節の書が到着して種子を送ってきた。七日に種を蒔いて、二十一日に種の殻が割れ、中から芽が出てきて、四月二十日に写す」と山本榕室の手で朱書きされている。



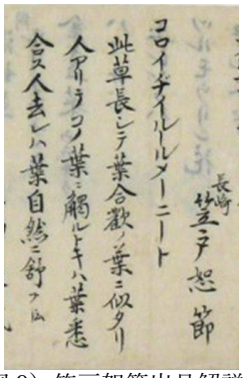
（図７）屈佚草図説和文草稿

そして３月 25 日に「山本読書室」の物産会が開かれた。物産会とは、文献研究とフィールド研究が平行して行われる共同研究会である。皆で標本を持ち寄って、年に１回盛大な標本の共同研究会を開くのである。オジギソウは、この年の３月に芽が出たばかりだったが、物産会に出品されている。

（2）共同研究会「物産会」とは

この「山本読書室」の物産会については大変な記録が残っていた。1750 年代から 100 年間ほど、三都（江戸、大坂、京都）では「本草博物学」研究が盛んに行われたが、それらの記録はもはや散逸して残っていない。そのため、江戸時代の自然研究がどのように行われていたのかを知ろうとしても、その手掛かりはほとんどなかった。ところが、私が調査をした御蔵に「山本読書室」の物産会の記録が残っていたのである。それによると、60 年間、通算 51 回、原則５月～6 月に、盛大な共同研究会が行われていた。出品者は延べ 1897 名、実員 591 名、出品点数は 23,807 点、目録の原本である長帳が全 50 冊揃っていた（図８）。前述のように読書して文献研究をし、「採薬」(フィールドワーク)を行い、物産会(共同研究)をするという３本柱で自然研究を行っていたことが分かる。

(図８) 天保十三年壬寅三月物産会目録

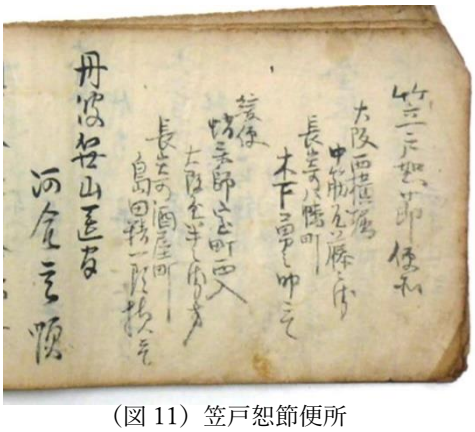


（図９）笠戸恕節出品解説

天保 13 年３月の物産会に、「コロイヂイルールメーニート」というオランダ名で、長崎の笠戸恕節が出品しているが、そこには「此草長ジテ葉合歓ノ葉ニ似タリ　人アリテコノ葉二觸ルトキハ（人がその葉に触れると）葉悉合ス（葉が全部一緒に合ってしまう）人去レバ葉自然ニ舒ブト云（そして人がまた去れば自然にまた伸びる）」という解説が付いている（図９）。笠戸は、海外の珍しい植物を長崎から入れるために、門人として長崎に行っており、「山本読書室」の係をしていたわけだが、それは彼だけではなかった。

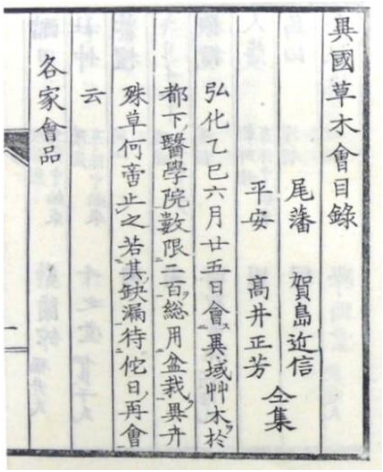
「諸国門人居処并飛脚便所認」という長帳がある（図 10）。これは山本亡羊自筆の住所録である。門人が住んでいる場所と、それに合わせて飛脚、今で言う郵便と、便所は何かよく分からないが、これらについて書いてある。言わば、情報をどういう形で発信し、受信したかというアドレス帳である。それで「笠戸恕節便所」と書かれたところ（図 11）を見ると、読書室から長崎の笠戸の所へ品物を送るときは、大阪西横橋の中筋屋藤兵衛に手紙を渡し、そこから長崎の八幡町の木下勇之助の方へ行くと書いてある。その次に緩便、これは恐らく急ぎではない便だと思うが、蛸薬師室町西入の大阪屋半兵衛に頼むと長崎の島田精一郎の方へ行くと書いてある。このように個人的に郵便を請け負う請負先が恐らく便所だったと思われる。それとは別に、地方の街道筋ごとにたくさんの飛脚がある。余談だが、丹波篠山藩の藩医である河合玄順は、河合雅雄先生、隼雄先生の先祖である。

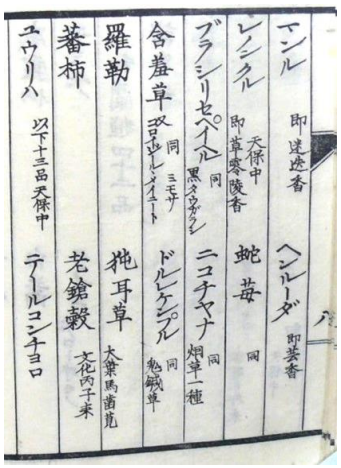
（図 10）諸国門人居処并飛脚便所認


（図 11）笠戸恕節便所

（3）屈佚草（オジギソウ）ブームの契機となった異国草木会

この後、関西でオジギソウブームが起きる。それは弘化 2 年(1845)に京都で「異国草木会」という重要な会が開かれたことによる。この「異国草木会」は、尾張藩で京都に詰めていた賀島近信と、京都の香具所で御所へ香を納めていた高井正芳の 2 人が、200 品を集めた展示会だった（図 12）。


異國草木會目録
尾藩　賀島近信
平安　高井正芳　仝集
弘化乙巳六月廿五日會異域艸木於
都下醫學院數限二百總用盆栽異卉
殊草何啻止之若其缺漏待佗日再會
云
各家會品
（図 12）異国草木会目録


（図 13）含羞草　ミモサ

その中に「含羞草(がんしゅうそう)」という名で、コロイジール丶メイニート、屈伏草が入っていた。コロイジール丶メイニートはオランダ語で、「わたしに触らないで」という意味で、元々はラテン語に由来している。直訳して、含羞草と訳している。学名はミモザプディカなので、ここにも「ミモサ」と書かれている（図 13)。

Ⅳ　蘭学とオジギソウ　―「本草博物学」に内在する自然と人間社会の相応

亡羊は、張華が書いた 3 世紀の古い『博物志』という古典に出てくる名前、典拠に基づいて、オジギソウを「屈伏草」と呼ぶべきだと主張した。それは良い政治が行われているときに植物が反応するという、自然と人間社会のコレスポンデンスを一つの文化と認めて、名前を付けるときにはそういう文化を大事にしようとしたからである。それを非科学的だと批判することは簡単かもしれないが、そういう知識のあり方が「本草博物学」の中にはあったのである。そうではない新しい西洋起源の蘭学が日本に入ってきたとき、これをどのように捉えたのかについて、オジギソウを通じて考えてみたい。

（1）山本亡羊の時代の学問

これについては、20 年以上前に私が別のテーマで研究していたことと関連していて、自分でも驚いていることがある。

幕末の日本人は、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』を読んでいたが、それは英語訳ではなく、オランダ語から訳されたものであった。その日本で初めてのオランダ語から日本語へ訳した人物が、黒田麹廬(くろだきくろ)(通称：黒田行次郎)である。黒田麹廬は膳所藩の藩校の校長、黒田扶善(くろだふぜん)の息子で、黒田扶善は梁洲(りょうしゅう)という号を持つ人物である。彼はシーボルトが来日したときに蘭学を志したが、親戚や周囲から猛反対を受け、止むを得ず漢学にとどまり、膳所藩儒として藩校の校長になった。しかし、若い頃にどうしても蘭学を学びたかった梁洲は、息子の行次郎にオランダ語を勉強するように勧めた。行次郎は緒方洪庵の適塾で学び、後に麹廬という号を得て『ロビンソン・クルーソー』を訳している。その麹廬の父・梁洲が、実は山本亡羊の親友であることが最近分かったのである。

私がなぜこれを強調するかというと、黒田梁洲は若い頃に蘭学を学ぼうとして果たせず、息子に託したが、彼自身もかなりオランダ語を読むことができたと思われるからである。そして、弘化 2 年(1845)6 月 25 日に京都で「異国草木会」が開催され、渡来植物の「本草研究会」が行われて、そこにオジギソウが出品され、オジギソウブームが起こったわけだが、その 7 月 13 日に、梁洲は『顔羞草記』という漢文の文章を書いているのである。

（2）江戸後期、幕末に伝播したヨーロッパ思想（生命観）

梁洲は儒者だが、若い頃に蘭学を志しただけあって、1838 年にオランダで出版された『リセランド人身窮理書』を、原文か訳文かは分からないが読んでいる。これは人間の生理学の

入門書で、序論で「生命とは何か」という生命論が展開されているが、彼が『リセランド人身窮理書』を理解していたことは、この『顔羞草記』を読めば分かる。

フランス革命直後のナポレオン時代の 1817 年、パリの医学校の医学者であったリシュランが書いた『生理学入門』という本が出版された。これは 1860 年代まで増訂改版がなされ、19 世紀前半のフランスの生理学の教科書としてよく読まれた。そして、元のフランス語から英語、ドイツ語、オランダ語などに訳され、ヨーロッパ中で生理学の教科書として使われた。『リセランド人身窮理書』は、その序論を蘭訳から翻訳したものである。

1810 年代にヨーロッパで「生命とは何か」「動物と植物の間はどうなっているのか」ということ、存在の連鎖についての議論がなされた。18 世紀の半ばの自然神学では、神が自然を創り、神の被造物(creature)として自然があると考えられ、すべてのものはヒエラルキーがあって、great chain of beings として存在はすべてつながっていると考えられていた。一つだけそのリンクから外れて、人間があった。人間は存在の連鎖の中で、特権的に万物の霊長として外され、他はすべて存在が連鎖し、生命はつながっているというキリスト教的な生命観があった。

そうすると 18 世紀の後半に、「動物と植物の間はどうなのか」について、哲学者たちが議論を始め、実験科学、観察科学、哲学が一緒に発達していった。そういう背景があって、リシュランの『生理学入門』には、当時の一般的な生命観が書かれている。黒田梁洲は『顔羞草記』において、この草は「感覚性」と「収縮力」を備えており、動物の最下と、植物の最上との際にある存在である、という 1838 年刊行の「利摂蘭土人身窮理書」すなわちオランダ語版『生理学入門』の説を紹介している。この用語は、梁洲の訳語か他者の訳語か不明である。今 1838 年のオランダ語版は手に入らないので、オランダ語の原語を確認できないが、フランス語原書を見ると、対応するフランス語原語は“sensibilité”と“contractilité”と分かる。英語の sensibility と contractility である。これは、1810 年代にヨーロッパ中に普及した『生理学入門』が、幕末の蘭学者の中に知識として定着していたことの証左の一つではないかと私は考えている。たかがオジギソウ、ミモザプディカであっても、この文章を読めば、深い意味があると思われる。

（3）ヨーロッパ思想（生命観）と儒教の知的原理“不可知論”

「生命とは何か」「動物と植物の間の議論」「存在の連鎖」というヨーロッパの思想についてはこの解説にも出ていて、梁洲の結論が赤字で書かれている。まず、「吾邦の本草家呼びて指佞草と為し、これを博物志に證す。愚按ずるに指佞は蓂莢の等にして」とある。「指佞」は偽善者を指し示す草というよりも蓂莢、つまり立派な政治が行われているときに反応する植物である。しかし梁洲は、指佞草にせよ蓂莢にせよ、こんなことは嘘だ、信じる者は馬鹿だと考えて「皆荒誕不経なり　吾斯れ信ずる能わず」と書いている。亡羊は、人間社会と自然は対応すべきであるという伝統的な自然観を持って、屈佚草と名付けると言っている

が、少し若い世代の漢蘭両方に通じていた梁洲は、指佞草であれ蓂莢であれ、一切信じないと主張しているのである。ただし、「蘭書の説は略々理に近しと雖も、要するに臆度を免れず」と言って、それは憶説・推測であり、確かな証拠はないとしている。

梁洲の結論は、「聖人は其の知る可からざるに於て蓋闕如たり」、聖人と言うものは、自分の知らないことは言わない、知ったかぶりをしない、あたかも知っているかのようにいい加減なことを言うようなことも一切しない。ヨーロッパ人が言っていることも憶説であり、そのことについても私は言わないとして、「聚訟の勝を求めんよりは、宜しく造物の妙に帰して止むべし」と不可知論を採っている。是非を争って論争に勝つよりは、分からないものは分からないとして、敢えて超自然的なものを一切信じず、分からないことを分かるとしないという儒学の不可知論の原理に帰っていく。リセランドの説である「存在の連鎖」なども彼は理解していたと思うが、それを理解した上で、「それは憶説である。私は理に近いと思うが、私はそれを言わない」としている。ここで梁洲をはじめ漢学と蘭学を両方学んだ世代は、ヨーロッパの理論に対してそういう儒学の伝統に則った態度をとったのである。

この後の世代では、「儒者は親の敵である、徹底的に窮理をやるべきだ」と福沢諭吉が言ったが、この福沢諭吉の洋学論、「儒者は親の敵である」という説をどう考えるかは、まだ今日の問題だと思う。

質疑応答

Q1　命名にはどのような文化的、思想的背景があるのか
Q2 「徒に著作せず」とする研究姿勢の背景は何か
Q3　学術研究の成果を後世に残すには何が必要か
Q4　日本における自然界と人間界の照応（コレスポンデンス）の系譜を、ヨーロッパとの対比でどう理解するか
Q5 「本草学」の学会組織はどのように発展したのか

Q1　命名にはどのような文化的、思想的背景があるのか

亡羊という名前は「羊が亡くなる」と書くが、今はそういう名前は付けないので、江戸時代後期に流行した名前なのか。

また、オジギソウという名前について、アメリカの日本人学校では「起立・礼・着席」の「礼」を“watch your shoes”と言っていた。見かけはお辞儀したようになるので、西洋合理主義のアメリカではこういう言い方になるのかと感心した。反対に本日の話で、オジギソウは礼儀正しい植物であるという儒学的発想で物事が展開されることを知った。武士が世の中を支配していた時代は、武士は礼に厚く、孔子の教えでも仁や礼が大事にされていたので、これは理解できる。そうすると、西洋合理主義の改革が進んでいた中で、科学を習っていなかった日本人は道義で理解しようとしたと思うが、道義なるものがあったのか、またそれを儒者が担っていたのかどうか。

（松田）

「亡羊」という名前については、「亡羊の嘆」ということわざはあるが、なぜ彼が「亡羊」という号を名乗ったかは実は分からないし、本人も説明していない。

また「オジギソウ」という名前については、渡来植物なので日本に来た当初は名前がなかった。ヨーロッパ各国では名前があり、「私に触るな」という意味のラテン語名や各国名、ミモザプディカという学名があった。それをオジギソウと名付けたのは、恐らく江戸の寛永寺の位の高い僧侶であろうと言われている。その人がどういう背景で名前を付けたかは分からないが、典拠がなく、本草学者からは学問的な名前ではないとされている。

本草学者は、名前を付けるときは必ず古典に返って付けることを旨としている。本草書に関する古典知識や、日本の和歌、『古今集』『万葉集』など日本の伝統的な文献から付ける名前を雅名という。例えば、貝殻は典型的だが、貝殻には雅名(和名)と方名(地元の人が各地で付けてる名前)と学名(漢名)がある。そのように、江戸時代から明治の中期頃まで、動物・植物・鉱物それぞれには 3 つの名前があった。

雅名を付ける能力は文化力である。大坂の木村兼葭堂は大坂の町人学者として貝殻をコレクションしていたが、京都の本草学に対するコンプレックスがあった。つまり、大坂は商

品経済のメッカとして物が集まり、新しい貝殻もたくさん集まるが、それに雅名を付ける能力がなかったのでコンプレックスを持っていたのである。そこで木村兼葭堂は、小野蘭山の兄弟弟子であり、同門で互いに知っていた山本亡羊に、「御地(京都)には貝殻のコレクターがたくさんいて、もっとたくさんの専門家がいる。私には雅名の付け方が分からないので、どうか指導してほしい」と書いた手紙を送っている。雅名と漢名を付けることは京都の学問の世界でしかできなかったことを、木村兼葭堂が認識していたことに、私は驚いた。

Q2 「徒に著作せず」とする研究姿勢の背景は何か

どういう背景から「山本読書室」の学風ができたのか興味を持った。「徒に著作せず」とあるのは、逆に徒に著作をしていた人がいたから、そう言ったのか。またそれは同じ儒学の方々を指したものか、あるいは蘭学を意図して言ったのか。それが儒学者だとすると、精力的に「物産会」をしていて、たくさん著作をしていたようにもとれる。蘭学に対しては「理に近しと雖も」必ずしも分かってないこともあるのではないかと言っている。どういう背景で「徒に著作せず」を書いたのか、先生の見解を伺いたい。

（松田）

塾の名前なのに「読書室」と名付けているのも変わっているが、「読書」とは、文字どおり「書を読む」ことであり、その場合の「書」は第一義的には漢籍 で、その次が日本の古典である。この塾には、あらゆる分野の中国の漢籍があり、本を借りて共同作業で写していた。読書とは写すことで、借りてきた本を写しながら読む。そうすると蔵書が残る。山本亡羊には 5 人子どもがいたが、15 歳くらいから 25～30 歳になるまで 20 年間ほど、財布を一つにして、5 人の子どもに指示して朝から晩まで書写させた。そして膨大な蔵書ができた。写すことと読むことは同じなので、ものすごい知識を身体で覚えたことになる。

この塾では弟子にも同じことをさせたので、並の学者よりも知識を持っていた。いたずらに書くことを禁じたのは、ご指摘のように書き散らしている者がいたからである。物も読まずにいい加減なことを書いている連中が目について、怒っていたわけである。亡羊に『読書記』というものがあるが、これは人の書いた本の書評を記したもので、書いている人よりも自分の方がよく読んでいるので、ダメ出しばかりしている。そういう学風である。

それは漢籍だけではなく、日本の歴史に対しても同様であった。当時、日本の歴史については、徳川光圀の『大日本史』（当時は『日本史』と言っており、幕末に「大」が付いた）があったが、これは二百数十年をかけて作られた、皇室中心の明治維新、尊皇主義の出発点になったと言われるほどのものである。これを山本封山は独力で、全部写した。亡羊は『平家物語』を全部写した。それくらい写すことと読むことは同じだった。『大日本史』を全部一人で写した封山は、並の公家より歴史をよく知っている。

『大日本史』は、光圀公が京都に出張所を作り、水戸藩士に、京都の公家や寺社に残っている古文献を書写させて集大成したものだが、これとは別に、正月から大晦日までの宮中で行われる儀礼や祭りを古記録から集大成させた『礼儀類典』という叢書があり、封山はこれ

も一人で写している。つまり、水戸光圀が藩を挙げて取り組んだ二大著作を、封山は一人で両方ともすべて写したのである。亡羊はその息子で、『平家物語』を全部写し、そして余技ではあるが、琵琶を検校から習った。

『本草綱目』『万葉集』『古今集』などを全部書写して共有している家からすると、一番だめなのは、頼山陽（らいさんよう）だった。当時の山陽と言えば、広島の大儒の息子で、道楽息子だったが、学識があって、皆から尊敬を集めていた。一種日本史ブームを起こした人ではあるが、山本家からの評価はかなり酷かった。

山本家は儒医で、漢方で生計を立てていたので、蘭方とは対立していた。その頃、漢蘭折衷と言って、蘭方も取り入れる流派と漢方だけを純粋に追及する流派の二つに分かれ、外科を専門としているところは蘭方を取り入れ、内科中心のところは往々にして蘭方を排除していたが、具体的には、蘭方で使う薬が手に入らず、実際には治療ができなかった。理論は知識として入るが、治療は漢方でやらなければならなかったので、山本家は蘭方に対して批判的だった。

したがって、蘭方に対して「徒に著作せず」と意図して言っていたかというと、そういう面もあるかも知れないが、この場合の「徒に著作せず」は、文脈からすると、儒者は社会の中でどのようにあるべきかという意識から出てきたものだと思う。

Q3　学術研究の成果を後世に残すには何が必要か

これだけのものがきちんと記録として残っているところに感銘を受けた。記録に残すことは非常に重要だと思うが、翻って、デジタル化が進んでいる現代において、果たして 200 年後に私たちがしていることがきちんと残っているかと考えると疑問がある。我々がしていることを 200 年後まで残すためにはどういうことが必要だと思うか。

（松田）

私がこの 4～5 年、辛い思いをして耐えてきた問題はそこにある。この「山本読書室」の資料をいかに散逸せずに残すかということに、自分でも心血を注いできた。逆に言うと、なぜこれだけの資料が残ったのかということを常に考えている。この家は、封山・亡羊・榕室そして 4 代目の章夫にわたって、それをきちんと残そうと力を尽くしてきた。戦後の日本社会は、いわゆる旧民法から新民法に変わり、それによって、家というものが制度的にも後に意識の面でも解体された。それにも関わらず、山本家は、その中で書籍だけでなく、器物、標本、絵画、軸物、書簡など、これだけの情報を、江戸時代から明治、大正、昭和、昭和 20 年の 9 月まで数世代にわたって保持してきた。なぜこういうことができたのか。それは、山本家という家を、総力を挙げて守ろうとしたからである。家のためにはすべてを犠牲にするくらいに情報を集め、家学（かがく）を守り伝えるため、皆が協力した家である。だから残っている。

近代は、そういう家学とは違う、近代的な知の制度化の中で institution（機関）を作って公的な資金で行う。フランス革命の中でナポレオンが登場し、あらゆる知を制度化したように、同じ時代に、規模は違うが、明治維新を先取りするような形で松平定信が和学講談所を作り、

医学館を作る等、知の制度化を行った。そういう松平定信の時代に対抗して、京都の学問、家の学というものを作ろうとした強固な意志を山本家は持っていた。

封山は松平定信と同時代の人である。封山の親友は寛政の三博士の一人で、知の制度化を担った柴野栗山、亡羊の先生は小野蘭山である。小野蘭山も幕府の医学館に呼ばれて本草綱目を講義した。日本で当時フィールドと文献の両方を彼ほどできる人はいなかった。山本家はその両方と密接な関係があった。そして、家の学として、官にも帝国大学にも付かないと言い張って、その伝統を大正の初め頃まで維持していたのである。

そのことを考えると、近代国家は税金を使って知の制度化を行うが、大学、研究所、会社、国などでの知的な活動の記録を後世にきちんと残すことができるかどうかという課題がある。非常に例外的なことかもしれないが、山本家は大変な努力をしてそれをやったと思う。江戸時代、京都にはたくさんの塾があって、もっと大きな漢学塾もあったが、社会的変動の中でほとんど資料が散逸している。この家がそれを残したことの意味を考えると、今の質問は私も本当に身につまされる。私ができることとしては、今はいろいろな事情で資料はすべて京都府立資料館に塩漬けの状態になっているが、18 世紀後半～19 世紀前半の 100 年にわたる京都の儒医の家の総合的な博物館を、タイムカプセル的に何らかの形で残すことであり、それは意味のあることだと思っている。

逆に現代は、古い意味での家というものはなくなってしまったが、私たちの知的な活動、芸術的な活動、経済活動などいろいろと大事なものを次の世代にきちんと伝えていくことは法律だけではできないので、風土というようなものが必要だと思う。この家の場合は、家の学を伝えようという強固な思いがあった。もともと儒教は先祖崇拝の起こりで、この家は仏壇がなく、儒教式の粗末な位牌があるだけだが、先祖崇拝をきちんとしている。

Q4　日本における自然界と人間界の照応（コレスポンデンス）の系譜を、ヨーロッパとの対比でどう理解するか

自然界と人間界の照応(コレスポンデンス)について、今は「東日本大震災が起こったのは政治が悪いせいだ」とならないが、平安時代に菅原道真が亡くなった後にいろいろと天変地異が起きたときは、「菅原道真の祟りだ」と言われた。古代ギリシャのソポクレスの『オイディプス王』の場合は、テーバイの町が不作になったり、疫病が流行ったりするのは、オイディプス王が自分の父とは知らずに父を殺し、自分の母とは知らずに母と結婚したせいだということになっている。これがルネッサンスになると、マクロコスモスとミクロコスモスのコレスポンデンスという思想が生まれて、これはゲーテの頃まであった。日本でいう自然と人間の照応は、ヨーロッパでいうマクロコスモスとミクロコスモスの照応のような考え方だったのか、先生のお考えを伺いたい。

ヨーロッパの場合、自然そのものをブックとみなして、自然という本を読むという伝統がある。そういう伝統は日本にはなかったと思うが、どう思われるか。

ヨーロッパでは、リンネはすべてシステムと名付けているが、システムという発想が日本

にはなく、私もそう思う。ミシェル・フーコーは、言語学、博物学、経済学の 3 つでヨーロッパの近代ができたと言っているが、それに相応するものが日本にはなかったと思う。それについて、先生の考えを伺いたい。

（松田）

最初の質問については、ヨーロッパ的なコレスポンデンスの考え方が日本に元々あったのかということと、ヨーロッパ的なコレスポンデンスなるものが日本に入ってきたときに、どういう受け止め方をされたのかということの 2 つがあると思う。

先ほど例に挙げた、天変地異と為政者の徳・不徳というのは日本にもあった。ところが、ヨーロッパのコレスポンデンス的な発想が、日本にどのように入ってきたかということについては、具体的な例は一つくらいしか思い付かない。ヨーロッパの植物学が日本に入ってきたとき、日本には本草学があったが、リンネ以前、リンネ以後のさまざまな植物学書、博物学書が時期の区別なくヨーロッパから入ってきて、使う人も区別なく、勝手に利用していたという側面がある。そういう意味でも、体系的に知識を導入することができなかった。

ただ、自然と人間との対応ということで言えば、植物は月の満ち欠けと関係があるとヨーロッパの本に書いてある。それを日本の本草学者がどの程度理解していたかについて関心があり、今調べようと思っているが、まだ成果が出ていない。ヨーロッパでは植物と月の関係性についてきちんと書かれた農事暦のようなものがあり、それは日本にもある。

ヨーロッパの園芸書が日本に入ってくるときに、そこにはヨーロッパにおける植物と自然との関係、月と植物との関係、人間の生活と植物の関係などヨーロッパのコレスポンデンスが書かれていて、それを日本で翻訳した人がいる。その分析はまだしていないが、実は、佐久間象山（さくましょうざん）がその翻訳書を読んでいる。佐久間象山は小さな松代藩の改革派で、軍事的な大砲や蘭学だけでなく、農業改善活動も行おうとして、ヨーロッパの農業書の翻訳書を手に入れた。その翻訳は薩摩藩がしたものだが、それにはヨーロッパにおける自然と農業との関係がきちんと書かれている。それを彼がどのように読んだかはまだ分からないが、少なくとも薩摩藩はきちんと翻訳している。その本のルーツは 1750 年頃のイギリスのミラーという人の農学辞典で、その要約版(abridged edition)のオランダ語訳を薩摩藩が訳している。これは何を意味するかというと、薩摩藩は植民地としての琉球や島々を含めた藩全体の農業の近代化、生産性や生産高上昇のために、一生懸命に農学研究をしていたということである。ヨーロッパのコレスポンデンス的な発想が、日本にどのように入ってきたかという例の一つだと思う。

2 番目の質問の「自然というブック」という考え方が日本にあったかについては、それはなかったと思う。本という概念は、ヨーロッパには聖書などがあるが、日本の場合は書というと儒教の経典になる。儒教の経典を読むこと、あるいは、それに関して本草書を読むことが自然を知ることだった。自然そのものを本として読むというより、もう少し哲学的な中国の自然哲学が入ってきており、本と言う概念はなかったと思う。

3 番目の質問は、18 世紀の日本の知というものについて、一つの構造としてのシステムのようなもの、目に見える形のある特徴、フューチャー、システムが日本にあったかどうかという質問だと思うが、私は日本的なものがあるのではないかと思って研究している。そういう点で、日本は中国とは違うという意識が強烈にある。どう違うかというと、17 世紀、元禄時代にケンペルが日本に来たときは、仏教、神道、儒教をすべて「道(どう)」と表現し、儒教と言わず「儒道」、仏教と言わず「仏道」と言っていた。色道、仏道、儒道、神道、すべて「道」であり、教や学ではなかった。

そういう意味では、蘭道というのはあり得ない。新しい学問としてヨーロッパの学問が入ってきたとき、日本人は「道」として捉えず、「術」として捉えた。「術」と「道」は違う。なぜ蘭道があり得ないかというと、一つのシステムがあって、そのシステムを補完する意味で蘭学を利用したからである。

日本には採長補短、自分の足らないところを補えばよいという考えがある。その典拠は中国古典にはなく、日本独自のようだ。中国にはアヘン戦争のときに、中体西用論というものがあったが、これは中国の精神で、有用なものは外国から入れればよいという考え方である。日本の場合、外国から入れるものはあくまでも「入れるもの」であって「道」とは呼ばない。「仏道」「儒道」は元々外国から入れたものだが、日本人は 17 世紀より少し前から「道」という言い方をしており、医学も「医道」という言い方がある。日本人は「道」が好きである。そうでありながら、ヨーロッパのものが入ってきた蘭学の時代から 200 年経っているにも関わらず、日本語の中でも感覚的にも「道」にならないのは、何かシステムのようなものが日本にあるのではないかと思う。その日本的なシステムは何なのか。フーコーの言うヨーロッパの知のシステムのようなきちんと説明できるものがあるかどうかはまだ分からない。

Q5　「本草学」の学会組織はどのように発展したのか

「日本物理学会」のルーツ は、明治 10 年にできた東京数学会社(会社とは society の意味)が出発点で、その後「東京数学物理学会」「日本数学物理学会」を経て、結局「日本数学会」と「日本物理学会」に分かれている。植物学、本草論の場合は、どのように移り変わっていったのか。

（松田）

「山本読書室」の明治以降の歩みを紹介することが答えになると思う。

明治 5 年に旧制小学校、次に中学校、高等学校が成立し、明治 30 年に法律的に京都帝国大学ができた。そのなかで明治 20 年代まで「山本読書室」は活動する。幕末の混乱期を除けば、明治期の 30 年間、活発とは言えないが必死の努力をしている。

どういう努力をしたかというと、一つは政治的な運動で、漢方をいかに守るか、漢方をいかに近代化するかという政治活動である。自分の家の経済的基盤を守るためでもあるし、漢方医を守るためでもあり、山本家の当主山本章夫は関西の漢方医のリーダーになった。本草学の方は、明治 8 年に塾を再開して学生を採る。そこでは博物教育、本草教育も行うが、漢

学中心であった。自分たちは、本草出身の研究仲間を集めて、京都博物会という学会組織を作った。それは 10 年くらい続き、本草学の近代化を図ろうとした。しかし、漢方の方の経済的基盤が続かず没落した。

明治 8 年～明治 30 年代頃までの「山本読書室」の活動については、もっと研究すべきだと私は思っている。なぜかというと、例えば、明治初期に、政府は殖産興業の旗を振るが、それに対して京都博覧会の基礎的な準備では京都の医者たちが大活躍しており、そのなかで山本家は、特に京都の茶業の近代化を進めるための基礎調査として、宇治を中心とした茶業の調査を「山本読書室」で行った。同時に、伝統的な物産会を博物会として形を変え、珍しいものを集めて皆で情報交換もしていた。

このように、近代化に向けて新しい対応をしようと必死に努力していたが、経済的基盤である医業が成り立たなくなってしまった。結局、次の当主山本規矩三は京都の博物館の技監になり、東洋美術史家として活躍する。本草が持っていた漢方の世界との結び付きが完全に断たれ、知の制度化に対抗できなかったが、一つの知識のあり方を追求するという意味では、純粋性を保とうとしたことは確かである。

写真というものが世に出る前、人々は物を写す写生をしていた。今回、和紙に描かれた写生画が全部で 3,500 枚ほど出てきたが、そういう面でも、明治期の当主であった山本章夫は、日本の博物画の歴史の中で、その名をもっと評価されてもよいと思っている。

発 行 日　2024 年 9 月 17 日
講演著者　松田　清
編集発行　公益財団法人　国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力　アトリエ アロ　大仲佐代子

ISSN 2759-0577

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）